

昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
昭和六十一年四月十五日 発行（毎月一回・十五日発行）

（通第四四一号）

次

目

母儀に遣わさるる御返事	………	法然上人	………	(1)
信念の修養は實際問題に ——如くは無し	………	近角常観	………	(5)
釈迦佛本生譚	………		………	(10)
慈光日誌抄	………	西元宗助	………	(12)
無相師述「極重悪人唯称仏」	………	岩崎成章	………	(14)
聞光願生	………	清水凡禿	………	(17)
歎異抄に導かれて	………	花田正夫	………	(21)

慈光

第三十八卷 第四号

母儀に遣わさるる御返事

法然上人

母君よりの御文

一筆とりむかいまいらせ候。御坊はるかに見奉らず、明
けくれ御ゆかしこそ思いまいらせ候。われわれ今日明日
を期しがたきようにこそ候へ。ただとにかくにあさましき
身にて候。ちと御下り候て御覧じ候へかしと思ひ候。さも
候はずば、やすく生死をはなるべきようをこまごまとしる
し給へ。それを臨終の善知識、上人とたのみ候べし。申し
たきことあめ山にて候へども、筆をとめ参らせ候。

母君への御返事

條々に仰せられ候。ごしよう一大事の御心がけ、まこと
にまことにかんようにて候。

そもそも後生と申すことは遠からず、今生にての御心も
ちにて後世もあらわれ候。されば地獄、極楽もようならず
目の前に御座候。

まず人間の有様は、高きもいやしきも、富貴も貧なるも
いろいろさまさま変れども、思ふことはたえぬものにて御

まさりたきなどとおもふは、業力なり。地獄を造り、苦し
みを求むる事にて御座候。

啓蒙品三

されば法華経にも「三界無安、猶如火宅、衆苦充滿、苦
患如是」と説かれ候。この文のころは「三界のうちやす
き事なし火の家の内のみ、いろいろさまさま苦しみの身な
り。これをつねに御心得候べし。……生じつ、死しつ、病
みつ、老いつ、かかる苦しきことは何時までもさかんにし
てやむことなき世の中ぞという事を佛もかように教へたま
ひて、人間は思ふことの思ふように候はず。いのちありた
きと思へども、愛しき人にも離れ、憎き人にはそひすむま
じきと思うところにもすみ、おもひかなわぬ事あり。すこ
し程へだつれば会ひたき人にも会はず、見たき者も見られ
ず、親にさき立つ子もあり、子にさき立つ親もあり。若き
をさき立てて老いたるが残るもあり。かかるさかさまの事
のあるゆえに、あらぬ思ひをすることも、この世に輪廻せ
しゆえなり。何か楽しみ、何か思ひのあるべきぞ。今日は
榮華にほこりて、世になびかぬ草木もなき程の人とても、
明日は亡ぶるならいにて、落ちぶれ悲しみあり。今朝まで
は花やかに、いろ香も深く乱れ髪、まゆずみにおひ、た
ぐひなきその人も、夕べには野辺の煙とたちまちに、寄り
添ふ人も遠ざかり、ひとりかばねをさらす。
ただただ世の中は朝顔のはかなきわざにたはむれて、今

座候。人の富貴、榮華を見ききしてうらやましく思へども
その富貴のうえにもなやみはあり。子が欲しい妻がほしい。
又は憎き者をねたみ、又はおもふ人に別れ悲しみ、それぞ
れに物を思ふ苦があるものなり。貧なるものは、乏しくし
て味気なく、人にあなどられ、いやしめられ、たまたま人
なかへ出ても、かたすみにかがみ、物云ひかはす人もなし
あらあさましのわが身やと、おもはずして、思いてかなは
ぬ事を願ひ、苦のせむること、これ皆三界輪廻のたねとな
りて、くるまの庭にめぐるがごとし。六道に迷ひ地獄より
地獄に入りて苦しみをうけ罪を造るさまの悲しさよ。
鬼と云うもわが心から、地獄といふも、八寒八熱、三途
の大河。つるぎの山、死出の山などといふも、ことごとく
わが業力にて造りなして、心の鬼と身をせむる。
ほしい、おいしい、いとしい、かなしい、がまんじやまん、
とんよく、しんにがおりて、世に深く貪着して名利、冥
加につのり、人によく云はれ、ほめられ、何時にても人に

日や明日やとうち暮れて、何か菩提のたねならん。ただ一
筋にのちの世の、いとみなあるべし。此世は夢のうち、と
てもかくても過ぎ行けば、憂きも辛きも空しく、ただまほ
ろしの身の上に、去年や今年、昨日や今日も、移り変わる
世の中は、千歳、万年も、ただ一睡の夢のうちに、喜び
榮えもあり、悲しみ雨山なす事もあれども、さめぬれば跡
かたちもなきもの。あら、何ともなの浮世や、あらいたず
ら事どもや。あさましやと、よき事も悪しき事もいらぬこ
とわざかなと、ふつと思ひとりて、会ふ人毎にうち笑ひ、
すこしも心に物をためず、流れ水の流るごとく、ともか
くもあるにまかせて、胸にしばしも物を思はず、今日や死
なん、明日や死なんと思ひ給はば、物を畜へても何にかせ
ん、人に辛くあたりても、人がつらくあたるとも、よもし
らぬ身に、さもあらばあれと、悪念妄念おこり、腹が立ち
心にかなはぬ事あれども、よし夢かうつつか。わが世にあ
ればこそうらめしく、かかる事もあれと、よくよく思いと
りて候はば、何の思ふ事もなくなり、ゆうゆうと心やすく
候はん。
われも人も口には後世大事と云へども、心ふかく朝夕思
ひ入る人は、万人に一人もなく候程に、かまへてかまへ
て忘れ給ふまじく候。世も仮りの世、身も仮りの身、すこ
しの間に無益の事を思ひ、罪を造り、輪廻妄執の闇浮の世

にふたたびかえり給ふまじく候。

さきに申候ごとく、色々様々、しなこそ変れ、おしい、ほしい、いとしい、かなしい、あつき、さむきとおもふがみなわが心にて候。心といふものはさらさらたいなきものにて候。それを思ひ続ける程に、執心となりて輪廻する事にて候程に。ふつと心は無きものよ、心が鬼ともなりて身を責むるなれば、心こそ仇のかたきよ。煩惱がおこりて心が罪を作り出して、かかる苦しきくるしむを受くる事、凡夫なれば腹も立ち、いつくしきものが惜しい欲しいと思ふ一念が起るとも、二念をつかず、水に絵をかく如く、あらあさましやとはらりと思ひきり、なに心なく無念無想にしておはしまし候はば、それこそまことの心にて候へ。

いかに日々に念仏申しても、心によも山の事を思ひ、悪念妄念こもるなれば仏には遠く候。こころには何事を思ふとも口には念仏さへ申せば仏になるといふ人は、それはあまりの事。心はとてもよくならぬ、申す念仏をたよりにして、仏の救い給はんと誓にて、それをあやししく心得て、心は何事を思ふとも、念仏さへ申さば仏になるとばかり勧むる人は、邪見にて浅間しく候。おなじくは、心をよくよく護り、無益事を思はざるこそ、まことの念仏にて候。廻向なども唯何共なく、一切衆生、われ人平等、々々。一勺の水を大海に入れば、大海の水となるごとく、すこしの

善も平等と思ひ給ふべし。われといふものも人といふものも皆もとほひとつなり。さらに距てなけれども、生ぜしよりのかた、面々ところどころに、我と人と別々にありとおもひ續けて、人は我慢を起すとも、我は善かれ、人は悪るかれと思ふにより、それが業力となり、地獄におち、六道をめぐり候。これを輪廻と申し候。

まことの志ある人は、人の悪しき事あらば、我身の上に受けて悲しみ、何事もわれ人へだてなく、悪しかれとも思はず、人をそしらず、頼りなき人を言葉の一つもやはらかに、おとなしやかにひき立てて、すこしの物にもあいあい施して、人をたすくる心こそ、大慈大悲の孝養にて候へ。たとひ世上のならひなれば、何かと打ちまぎれ、とやかくうち暮し、又ひるがへして、浅間しのなせる業をあら恨めしの世やと、ふつと思ひ入りたまはば、罪もたまらず、切れはてて必ず生死を離れ給ふべし。

病中の御氣づかひは、此身は地獄、地水火風のあつまりて、五体六根を造りなせる物なれば、みな仮りのもの、あつめのものにて、家などに竹柱を集めて作りなしたるが如し。この身を土と火と水と風とがよりて作りて、心が主となりてみれども、心なき物なれば、姿は見えず、かたちもなしまして主さへ無き程に、わが身といふものは無きものなり。この五体六根の身をうけたるによりて、或は熱氣におか

法然上人のお歌

いかにしてわれ極楽にむまれまし 彌陀のちかひのなき世なりせば

さへられぬ光もあるををしなべてへだてかほなるあさかすみかな

月影のいたらぬ里はなけれどもながむる人のころにぞすむ

阿彌陀仏と十声唱へてまどろまんがきねぶりになりもこそすれ

池の水人のころに似たりけりにこりすむことさだめなければ

露の身はここかしこにてきえぬとも心はおなじはなのうてなぞ

され、或は寒におかされ、風におかされ、いろいろのものがおこりて、苦しい悲しき事、けしからずあれども、五体の身を受けたるやくなれば、かかる浅間しき苦を受くることよ、二度この身を受けじと思ひきりて、とてもこの身を捨て物なれば、寝たくば寝、起きたくば起き、心のままに身をもち苦しめ、捨て物と深く思ひきりて、わがころにまかせられ候べし。いかなる知識、上人、そのかみ、釈迦仏ほどの如来も、五体に身をうけ給へば、病の苦しみ、生老病苦とて、なくてはかなはぬ物にて候。臨終などのことも、悉く差別はなきものにて候。常々の御心掛けさへ深く候はば、死なば死ぬまで、生きば生きるまでと打ちまかせてあるがよく候。千年万年いきても一度は老いたるも若きも、死なでかなはぬものにて候。会者定離は人間の習ひなれば、誰に名残りが惜しき。又この世に今すこしすみたきあらかなしや。いま死ぬかよなどは、かまへてかまへて思召すな。左様におもへば輪廻して、生死の海に漂ふものにて候。死ぬること近づくなれば、必ず錯乱しては、断末の苦しみて、五体離れ離れになり、何と苦しく候とも、その苦しみに打ちまかせて、死なば死ぬまでと、なに心もなく、悠々と思召し給ふべし。呉々もこの御心持、忘れ給ふまじく候也。

信念の修養は 實際問題に如くは無し

近角常觀

信仰は活物なれば、時々刻々進歩すべきものでありながら、兎角沈滞に陥り易き弊がある。全体、信仰といえは内心の中に慥かに攫んだ心持がなければならぬ、所でその攫んだ心持がすると、忽ち、是れで充分であると腰を据えるのである。それ故、直ぐに沈滞に陥り易い。攫んだ様な心持がしたのは、つまり漸く信仰の闕をまたいで門内の微光を認めたばかりで、それから大いに信念の修養を勉むべきである。私の経験によるに、一つ不審な点ありて疑團氷解せざるとき、時機来りて煥然として明らかにすることがある。すると直ちに我は真隨を得た、極致に達したと心得る。これが抑々懈怠のもとである。これは信念の修養に最も戒むべき点である、全体信仰は恰も池を掘る如く、幾重とも知れぬ底がある。一つの底に達したからとて、それで充分と思うてはならぬ。その底を破って行くときは、又大いに進むべき余地がある。暫くすると、又第二の底がある。すると再び又充分であると考へて歩を止める、又歩を止め

るも無理ではない。底に達する毎に、相應に水が出てくるのである。いわゆる徹底した心持がするのである。門より進みて戸口まで行くときは、確かに一層明るくなるのである。即ち益々仏陀の光明が明らかに拝まれる様になつてくるのである。その時躍り上る喜びがある。そこで兎角尻を落ち付ける。されど本人は決して尻を落ち付けていることは自覚出来ぬ。本人は進歩している気持で、寧ろ得意である。さて、この得意な所が大いに戒むべきである。愈々時機来りて、戸口より玄関まで上がつてから顧みれば、決して進歩していたのではない。唯門と戸口の間の明りに満足して、同じ道を往つたり来たりして楽しんでいたのである。唯反覆していたのを進んでいると思つておつたのである。第二の底に達したときは、以前の第一の底に較べれば頗る深いと思つて、その水に満足しておつたのである。かく信仰には破つて進まねばならぬ無限の底がある。信仰の奥に達して直接に仏陀の大光明に接触するまでには、堂もあれ

ば、室もあり、無限の居間を過ぎ越さねばならぬ。現に、禪の経験にも「大悟十八通、小悟その数を知らず」とあるでないか。又真宗の安心にも「三願転入」ということがあるではないか。「三願転入」であるから三遍である、と思つたら大間違である。実は無限の転入である。信念の修養というは、漸々この底を破って進んで行くことである。所が如何にしてこの底を破るかを考へねばならぬ。若し大いに進むべき余地があることを自覚すれば、尻を落ち付ける筈はなけれども、自分が其の境界におれば自覚出来ぬのである。白状すれば、私の如きは決して尻を落ち付けてはならぬと知り乍ら、常に尻を落ち付けがちである。初めて気がついて進んでからでなくては、尻を落ち着けていたことが分らない。然らば如何にして大いに進むべき余地あることと知るべきか。即ち信念の修養は如何にしてなすべきであるか、という問題である。實地私の経験を言へば、静坐念を凝らして仏陀の膝下に跪き、大光明に接触する心持をなし、又終日行動言い為せし跡を顧み、又心中に描き出だした妄念を思い浮べて、心の底から慚愧の感に打たるも、慥かに修養の方法である。是れはなるべく常行として行いたいと思つてゐる。されど、その心中に於いて接する仏陀の光明が、兎角その時の信仰の程度に應ずるだけしか拝まれない。慚愧の心を振り起した瞬間は、如何にも心が洗わ

れた心持はすれども、それが止めば元の俗界に立ち帰つた氣持になる。これは慥かに底から底まで進む方法ではあるが、底を破るには力が弱い。常に信仰の内的経験談も慥かに修養の方法である、これは最も愉快な方法である。恰も諸国の人々が同じく都へ上りて、一夕燈下にて相会して各道中話をする様なもので、一人一人経験が異なるゆゑ最も興味が深い。特に各真摯の情を以て敬虔の念を運んでくれば、一座が融合する心持がする。又自己よりも一步進んだ人の経験を聞くときは、たしかに大いに進むべき余地があることを発明することもある、されど實地を言へば、自己よりも進んでいるということを探することは頗る難い。故に多くは今迄過ぎて来た道を反覆する事が主になつて、底を破つて進むには弱い。前途に輝ける希望の光明を目掛けて勇進するといふよりも、寧ろ後を顧みて過ぎ来りし山川を眺めてゐる様な氣持がする。然らば如何にして信念を練り上げべきか。如何なる方法にて底を破つて進むべきか、を講ぜねばならぬ。

全体、往くべき所まで往かずに満足してゐるのであるゆゑ、一步でも進んでいる人より眺めてみれば、先方では歴々我が不充分なことが分かるに違ひない。故に、此の如き進んだ人より打撃を蒙るがよい。全体、我が満足してゐるが病根である。故に非常に鞭撻を要するのである。此の如

き場合に遭遇するときは、如何にも我が高慢の頂に上がつていたことが自覚出来て、満身懺悔の念に堪えがたく、心中深くあやまり果てて、仏陀が我が信仰を増進せんがために、特にかく我を戒め給うのであると覺り、感謝の念と共に熾しく猛進するようになる。生きた人に接しても、又書物をもて此の如きことはある。されど人はへしぶといものゝである。一旦は起つても居ても身の置き所がない程に思つても、忽ち平氣になり易い。私の経験によると、最も信念の修養適切なるは實際問題に接触した場合である。抑々自分が未熟の信仰の程度に應ずるだけの光明で満足しているのは、つまり自分の心中に限なく光明が透徹しておらぬことを自覚せぬからである。所が、實際問題に臨み手を下すときに當つては、その光明が透徹しておらぬことが、事實上に現われんとせる。即ち信仰が未熟なる以上は未だ光明の到らぬ暗き点がある。人にも言い難き汚い心がある。かの静坐を凝らして慚愧するときは、唯汚き心を心中で否定するのであるから、心安く否定することが出来る代りには、忽ち又頭をもたげてくる。所が、實際問題に接して実行上にあらわるときは、右にするか左にするかで黑白清濁の分れ目となる。此の時は、汚い心が種々の口実を作り、種々の誘惑を具えて我々を逢迎する。この時一步も許してはならぬ。かくするが通常世間の当然であるなどと考

え、汚き方に傾いてはならぬ。満身仏陀の靈光を仰ぎて、斷乎として汚き心を打破つて、正しい道に直行猛進する。ここに於いて慥かに底を破つて深く入り込み薄暗い室より明るい室に入ることが出来る。かく實際問題につき當つて進んだ道は決して後もどりせぬ。一旦実行にあらわした以上は、釘を以て打ち付けたようなものである。再び此の如き場合に遇うも、何の苦痛もなく平氣で処理することが出来る。かく實際問題に接触して、一点でも仏陀光明の到らぬ点がないかを調べるが、最も適切なる信念の修養である。若し一点にても暗き点あらば自力が残っているのである。眞實仏陀の大光明に直接に交わらないのである。徹頭徹尾満身仏陀の命令の下に意志が働かないのである。

信ぜんと欲して信ずるに非ず

信ぜざる可からざるゆえに信ずるなり

信仰はそれ自身が窮極であり、それ自身が生命である。理由あつて信仰するのでもなく、目的に達するために信仰するのでもない。いわんや自分で故意にりきんだとて信仰が得らるるものでなく、何故に信ずるかと問われたとて返答出来るものでない。強いて言えば、信ぜねばならぬゆえに信ずるのである。信ぜずにおろうと思つても、一日も信ぜずにはおられぬからである。

一寸の細い
カラスを
縦に
さす中へ

つくづく過去を顧みて、既に通つて来た行程を考え、将来踏み出さんとする希望をたどるについても、仏陀の偉大なる力が我々の頭上に加えられることは、とても疑うことは出来ぬ。もし仏陀を信ずることがなかったならば、如何に道を踏み迷つたかわからぬ。人生の行路は所謂蟻の戸渡りである。一心正念、左右を顧みることなく、往くべき所へ往けたのは、仏陀靈勅の力強き呼び声があつたからである。仏陀の心は我々の心に入り満ちて、右すべきか、左すべきか、念々刻々親しき導きを蒙つたのである。然るに人間は勝手なもので、兎角何事も自己の力で出来たように思つてゐる。これは大なる誤りである。おきなき子供が頗る得意で活動しているときは、すべて自分の力でやつてのけたつもりである。よちよち足に力をいれて一人前歩いたように思つておれど、実は親の手につかまつてややひきずられて行つた趣である。その次は大手を振つて独立独行のつもりであつたが、何ぞ知らん。親は後にまわつて両手をひろげて、ひそかに擁護しつゝあつたのである。頑是なき子供こそ知らね、その歩きつゝあるところは一歩踏みはずせば逆様に墜落して身体を粉微塵にすべき高き縁側もあり、何処彼処にかまわず手を出す中には、炭火が真赤になつて忽ち大怪我を招くべき火鉢もある。つくづく自分自身の運命を考えて見るに、如何なる程度

頃

まで危殆に瀕しつゝあるのか底氣味悪くなる次第であるが、丁度それに比例して仏陀の広大なる力は、如何なる点まで用偏しているのであるか。仏陀の周密なる慈愛は、如何なる奥深き処まで徹到しているのであるか。今更の如く仰嘆して感謝の涙にむせぶことがしばしばある。

過去をふり顧りみて然るのみならず、将来を望むに亦同様である。現時の社会の實際を考うるに、人心の向背、世路の險惡なることは怒濤狂瀾の如きものであつて、我々の中に処することは、殆んど片舟を漕ぎ出したるようなものである。我々が此の如き風波荒き間に立つて、毅然として進むべき大勇氣の起るのは、前途確かに希望の燈明台が輝きつゝあるからである。信仰の上より来る希望の生命なるものは、実に言うべからざる力強きものである。

譬うべからざる味の深きものである。若しこの希望なかりせば、人世は暗黒である。無意味である。釈尊が成道したまいし時、東の空に閃めきつゝあつた星の如く、吾人は暗黒の世界の中に仏陀の光明を望みつゝ進むものである。一たびこの光明を目標としたる以上は、足元を顧みて遲疑する必要がない。人生の如何なるものも、この光明を遮ることとは出来ぬ。罪惡もこれを障うべからず。死もこれを障うべからず。雲来りて却つて平素氣付かざる光明の如何に遍ねかりしかを顧わし、死来りて永久の生命の如何に不朽な

るかを示さるる訳である。死は室内と室外とを隔つる一片の戸の如きものである。戸を排して親しく日光に沐するもよし。室内にありて倦むことなき大悲の光に育せらるるも嬉しい。つくづく考えて見れば、将来如何なる道に導かるかは勿論分らぬが、唯偉大なる導きは、たとい天地が砕くるとも、社会が顛覆しても煥として変ることなきは確か事実である。生かそうと殺そうと、仏意の如何は知るべからず。されど、唯訳なしに一步一步親しく仏陀の膝元に引きよせられて、攝取の心光によってのがれんと欲してのるべからざる救済を蒙りたる実感は、眼前の事物を見るより確実なる経験である。

さて、かくの如く過去に於ける仏陀の擁護を想い返し、将来に於ける仏陀の指導を感じるに、仏陀が我々に對して加え給う力の偉大なることはとても考への及ぶ所ではない。我々の仏陀に對する關係は、恰も蟻が大山の麓を廻りて遂にその全体を知る能わざる如く、魚が大海に遊泳して常に水を離る能わざるが如くである。我々は日常何気なく日暮しをなしつつあるときに、実に意外千万の出来事に遇うて、心中深く思い当ることが度々ある。而して、その事件のために内心深く打たる事が多い。殊に信仰に直接關係を有する問題に於いて、一挙手一投足のことが、実に偉大なる結果を持ち來たすことがある。たとい直接信仰の事柄でな

何人も出来る事ではない。ここに至って信仰自身が「仏陀の心」である。信仰自身が「仏陀の力」である。信ぜざるべからざるゆえに信ずるという事柄までが、仏陀の賜のもの

釈迦佛本生譚『月の兎』

——良寛和尚長歌——

昔々、天竺に、^{イギマンキツ}兎と猿と狐の三匹の獸がいて、おのおの誠の心を発し、共に仲よく菩薩の道を実行しておりました。帝釈天がこの噂を聞いて、三獸のありさまはどんな工合か、果してその行いは立派なものであるかどうかを試そうと、老いたる旅人に身をやつして、さて三獸のところへやうてまいり、自分は貧しく食物にも事欠く者だが、どうか助けてくれまいかと頼みますと、さすがに三獸はこれを直ちに承り、早速猿は木に登って木の実をとり、里に出て畑の穀物や野菜をあつめ、また狐は墓場へ行つて、祭つてある魚の類を持ち帰り、お爺さんに食べさせました。ところが兎だけはどこをさがし歩いて、えものがありません。お爺さんも猿も狐も、兎をさがすみ且つはげますが、兎はどうすることもできません。ついにお爺さんと猿と狐に向

くとも、信仰の導きの下に行いたることなれば、その結果は必ず信仰的に出来ている。この時に於いて仏陀の力の不思議なることを事実上に見ることが出来る。こゝに至って信仰は信仰せんと欲して自己を凝り固めて信仰を作るのではない。此の如き内心に於いて、事件に於いて、昭々たる事實は信仰せずにおろうと思つても信ぜずにはおられぬのである。寧ろ、如何にこの信仰を碍げんとするものもあるとも辞すべきでない。吾人はこの信仰のために生き、またこの信仰のために死すべきである。畢竟、信仰はそれ自身が生命であり、また目的である。我々は信仰することに於いて、仏になろうと、なるまいと毫も結果に關係すべきでない。「作仏を計る勿れ」といい、「地獄に落ちたりとも更に後悔すべからず候」という古聖賢の告白は、信仰の結局を打ち明けられた極所である。

此の如く仏陀の偉大なる力は、仰げば仰ぐだけ不可思議にして、時々嚴肅なる靈感に襲われて、想わず襟を正しくすることであるが、最後に至つて、私が最も不思議に感ずるのは、何故にかくの如き確實なる信仰が、吾人の内心に宿り得たかとの事である。我々の変り易かりし心の中に、頼み難かりし人間の力にて、如何で此の如き信仰の起り得べき訳がない。確かに是れ仏陀威力の所為にあらずんば、

である。この極点に達すれば、寧ろ信仰自身が仏陀廻向の靈界の一大事実であるという方が適切である。

南傳 三土卷 第廿九 三六 兔本生物語

って、薪を拾い集めて火を焚きつけることを願ひ、そうしていうには、自分は無力で何一つお爺さんをもてなすものがないことを恥しく思います、ついてはどうか自分の体を焼いた炙り肉を食べて下さいと云つて、燃えさかる焚火の中に躍り込みました。この時お爺さんは、帝釈天の元の姿にかえつて曰く、猿も狐もたしかにすでに菩薩とするに働するが、なかなか兎の心掛けは立派であると云つて、その亡骸を抱いて月の世界へ昇りました。これが月の中に兎の姿の見える理由だということです。

そして良寛和尚がこの兎の犠牲の精神に對してどんなに深く感動したかは、「月の兎」と題する長歌、それは和尚の長歌の中でも辞句の最も多い一大雄篇ですが、そういう長歌を何べんも作っている事実によつても明白であります。

帝

いふこと

格別也

煙

しめしめ (條)

その長歌の一つをかかげます。
いそのかみふりにしみ代に ありといふ猿と兎と狐と
が 友を結びて あしたには 野山にあそび ゆふべ
には 林に帰り かくしつづ 年を経ぬれば ひさか
たの 天の帝の (諱釈天が) 聞きまして それがまこ
とを 知らむとて 翁となりて そがもとに よろほ
いゆきて 申すらく いまし (汝ら) 類を異にして
同じ心に 遊ぶちよう まこと聞きしが 如くならば
翁が飢えを 救えと 杖を投げて 憩ひしに 易きこ
ととて ややありて 猿はうしろの林より 木の实ひ
ろひて 来りたり 狐は前の 川原より 魚をくはへ
て 与へたり 兎はあたりに 飛び跳べど 何ももの
せで ありければ 兎はこころ異なりと 罵しりけれ
ば はかなしや 兎計りて申すらく 猿は柴を 刈り
て来よ 狐はこれを 焚きてたべ いふが如くに な
しければ 煙の中に 身を投げて 知らぬ翁に 与へ
けり 翁はこれを 見るよりも 心もしめしめ (心もし
をしをとかなしんで) ひさかたの 天を仰ぎて う
ち泣きて 土にたふりて ややありて 胸うちたたき
申すらく いましみだりの 友だちは いづれ劣る
と なけれども 兎は殊に やさしとて 骸をかかへ
て ひさかたの 月の宮にぞ 葬りける 今の世まで

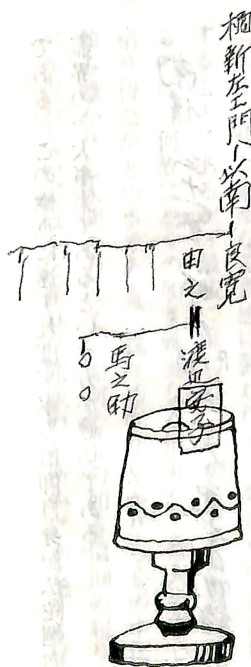
慈光日誌抄

御入院中の花田先生手術の経過良好(二月二十四日)との電
話を、浄住寺さんからいただいてホッとする。しかし、お
年がお年だけに少しも樂觀は許されない。それに病身の奥
様も自宅で御臥床中、ご夫妻とも、どんなにかお辛いこと
か。わたしは唯だ念じるばかり。過日、六角仏教婦人会の
初会で、お西の前お裏方さまからも、花田先生、お悪いそ
うで、と仰せいただく。

龍谷大学真宗宗の学生への特別講義、いよいよ本年度を
もって老齡の故にご辞退することになった。最終講義の日、
万感交々というよりも感謝感激の気持ち一杯でありました。
学生諸君に対しても、真宗宗の諸先生がたに対しても。わ
たしの長い教師生活四十余年の最後が龍谷大学の講義
であったこと、しかも真宗一内実はわが身の聴聞聴法の感
話でもありましたことは、ほんとうに幸であった、身にあ
まる忝けないことでありました。

も 語りつぎ 月の兎と いふことは これがもとに
て ありけりと 聞かれさへも 白たえの 衣の袖
は とほりて (涙がしみとほつて) 濡れぬ

良寛の生家の甥馬之助が放蕩に身をもちくずしたので、
その母安子にたのまれて良寛が意見をしに出かけた事があ
りました。しかし彼は三晩も泊ったけれど一向に口をきき
ません。そしてそのままいとまを告げる段になって、立ち
際に馬之助を呼んで草鞋の紐を結んでくれと云いました。
馬之助は今日に限って妙なことを仰せられると思いましたが、
云いつけられた通り草鞋の紐を結びました。すると、
その衿元に冷いものがポトリと落ちました。馬之助がびっ
くりして見上げますと、良寛が涙の目をしばたいて自分
をみつめています。馬之助はハッと感じ入りました。良寛
はやつと身をおこし、無言のまま立ち去りました。



西元宗助

最後の日、例によって大宮学舎の正門に立ちどまり、真
宗宗科学生らの真似をして、正門の本館二階にご安置の御
本尊に向つて頭をさげ、次いで守衛室の守衛さんに会釈す
る。教室に入ると、最後の講義というので一杯の学生。わ
たしは昨年末の十二月の講義にひきつづいて、「第十九願」
と「二十願」の悲願のもつ現代的意味につき、切々として
学生諸君に訴える。けだし、十九願と二十願を、真にわが
身のこととして受け入れないかぎり、第十八願の本願の思
召を、真にわが身にいただくことは不可能な筈であるから。
講義終つて、まことに名残惜しく。最敬礼して校門を辞す
る。

これで終りかと思っていましたら、幸い、わたしの講義
の学年度末試験が一月二十三日(木)でしたので、欣び勇
んで登校。しかも試験監督の手伝いしてくださるのが、日
頃尊敬する浅井成海教授でありました。でも不正などある
筈もないので、お願いして先生には研究室にお帰りいただ

く。

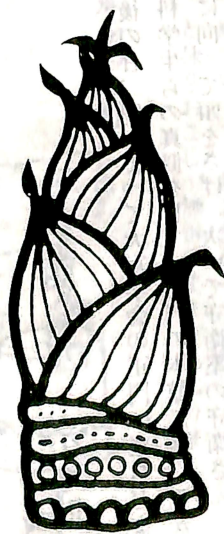
さて、学生諸君とは、いよいよお別れ、机間巡視しながら、あれこれと独り別れを惜しむ。やがて答案を書き終えて退出していく学生が出はじまる。それぞれが、ありがとうございました。先生、お軀お大事にと、いつてくれる。このような学生たちが、今どき、そうあるものであらうか。わたしは教室の出口に立って、拝みたいような気持ちで、一人一人を見送る。答案をまとめて教室を出ると、数名の学生が待ちかまえてくれた。ありがとう、ほんとうに有難う。

洛西浄住寺の奥様からお電話があつて、二月十七日（月）午后、花田先生いちおう御退院とのお報せをいただく、ほんとうは、もうしばらく入院しておられたほうが宣しいかと思われるのに、やはりお家のことが気になられてのことかと拝察されて、あまり喜べない。いや、ともかくも、よいお報せであることはまちがいない。と聊かホツとする。なお右のような報せを、名古屋から京都、浄住寺さんに通報くださる方は、もし花田先生のお宅（二道庵とでも申したほうが相応しい）が、もしお寺であれば、そのお寺の責任役員兼門徒総代にあたられる鬼頭康彦氏（名古屋居住）及び杉浦豊氏（岡崎市居住）の身内の津田よし子様（康彦氏の令妹）と鬼頭きよ子様（康彦氏息女）からであると承っています。

このお二人の方は、それぞれのお家庭をもたれながら、このように何くれとなく面倒をみていくのださるのでして、このようなことを記しますことは御本人たちのお気持ちに反するとは重々存じますけど、感謝の気持ちをこめて読者の皆様はその一端を、あえて披瀝させていただく次第です。ほんとうに有難うございます。

日々の外的事象は如来の發遣であり
日々の内的動乱は如来の招喚である

（北九州、藤富孝霊）



無相師述「極重悪人唯称仏」

中論家
即照
不即、不即、唯諸家

岩崎成章

“どうする”

「無相、今夜にも死なんならんが
どうする」

「往生の世話してやるで念仏申せ」
とあるゆえ、

未来は弥陀にまかせ念仏申すだけである

ナムアミダブツで死んでゆく

称えられても称えられなくても

極重悪人唯称仏とあれば

称えよの仰せのほかになにもなし

極楽なりと、地獄なりとも

○

人生皆「道」に迷っているのである。「生死の根本の道」がハッキリわからないので迷っているのである。聞法者皆「道」を求めているのである。「関東からの、来訪者また「道」がハッキリ、わからなくて京都まで来たのである。

金子
2684

それらについて「道」は念仏である。念仏よりホカに道はないぞよ」「ガンの最善のクスリは、この「クスリ」であるぞよと、聖人は、もともと現実的に、具体的にオサト下さっているのである。「ただ念仏こそ」、如来のどこ／＼までもおみすてのない、お慈悲の結晶であると、もともと、具体的、現実的に「救いの道」を明示して下さっているのが第二条である。ただ念仏こそ、生死出離の「唯一の道」であるぞよとハッキリと、おさとし下さっているのが第二条である。

念仏ははじめから「道」なのでした。十劫のむかしに如来法蔵さまが愚悪のワレラのために成就され、ワレラに与えて助けんとせられている、ワレラのための往生極樂の道なのでした。

親鸞聖人、歎異抄第二条のお言葉に「念仏よりホカに往生極樂の道は存知せず」とハッキリ仰せあり。ただ念仏してミダに助けられまいらすべし」とおす、めあり、念仏は、ただ念仏はワレラがそれと気づくまにすでに如来廻向の道でした。その道である念仏そのもののホカにナニカ学問的根拠を得たいと思っていたのは、マチガイでした、念仏はそうした学問的知識的な根拠とはまったく別に念仏そのものが独立しての「道」そのものでありました。「道」を求め、「道」をゆかんとするならば「ただ念仏申す」それよ

りホカには無いのでした。

池山先生のつねの仰せに、「南無阿弥陀仏、これだけだよ、これだけしかないんだよ、これだけでいいんだよ」と念仏されて居られしとか——あ、ただ念仏、ただ念仏、念仏そのものが道、道、道、

ナムアマミダブツ
ナムアマミダブツ

「ただ念仏」ということも、「よき人の仰せ」としていただくのでなければ、ホントーの「安心」にならぬ、「自分の体験」、「自分の領解」というだけではホントウの落ちつきにならぬ「よき人の仰せ」としての「ただ念仏して」でなければ。

ただ念仏は領解「ただ念仏して」は善知識の仰せ、これが大切。

「念仏も信心も無い、ただ如来様ばっかり」ということも、ありがたいことであります。

称えるということ、信ずるということへの執着を離れさせる、それが御廻向の信心のオカゲであり、その念仏が「ただ念仏」、「無義の念仏」なのである。

歎異抄第二条のオワリに、

この上は念仏をとりて信じたてまつらんと、また捨てんと、面々のオンハカライなり、とあるが、廻向の淨信を得ざれば「念仏をとりて信じたてまつる」ということは出来ないであり、廻向の淨信を得れば「念仏を捨てる」ということも出来ないことになる。

歎異抄第二条に、

詮ずるところ愚身の信心におきてはかくの如し——とある愚身の信心とは、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと云う「よき人の仰せ」であり、念仏成仏は真宗、という信心である、念仏よりほかに往生の道は存知せずと云う信心である。

歎異抄結文に、

親鸞におきては、善惡の二つ総じてもて存知せざるなり、とあって、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろづのこみなもてソラゴト、タワゴト、まことあることなし、とあるは機の深信。

ただ念仏のみぞまことにておわしますとあるは法の深信である。即ち廻向の信心によりてこそ右のお言葉（お領解）があるのである。

本願招喚の勅命

お念仏は称えるのであるが、本願招喚の勅命を聞くのである、いただくのである。「念仏申す」ことは「本願招喚の勅命をこの身にいただくことである。お念仏は称えもの聞きものである。

念仏はナムアマミダブツは「汝一心正念にして直ちに來れ、我れ能く汝を護らん、すべて水火の難に墮することをおそれざれ」の本願招喚の勅命である。衆生の願生心は如来の欲生心よりおこる。念仏は本願招喚の勅命であり、白道である。

「南無阿弥陀仏」というのは如来様の御自覚である。

一つは、凡夫というものは、どこまでいっても、惡衆生邪見無信の者であるという御自覚、もう一つは南無阿弥陀仏一つで救い遂げるぞよと云う御自覚、それで念仏いただくということは、ナムアマミダブツ一つということとは、如来様の御自覚をいただくことであり、それが私の自覚となるのである。

聞光願生

清水凡禿

どんな環境によつても支配を受けぬと頑張っている人がある。しかし、かく言っているそのこと自体が環境に支配されていることではあるまいか？私は周囲によつて毎日支配されつゝある私である。頗る弱い私であると知らしめられる。そのことが周囲に支配されぬ心境、即ち力強い境地ではあるまいか。

真実の姿に徹することが仲々難しい。然しながら、徹し得ぬ私と、はっきりと判らしていただいた時に、それこそ、真実の姿に徹した時ではあるまいか。

「知らざるを知らずとせよ、これ知れるなり。そは人智の絶頂である」と清沢先生は云つておられる。これこそこの辺の消息を物語るものと味われる。

(昭和十、十日)

覚者の救いの目あては、ハテ何者であつたろう？智者で

あつたか？善人であつたか？いや／＼愚者であつた、悪人であつた。それなのに、智者になり善人になつたような気がしたときは、救われたような気になり、愚者となり、悪人となつたときは、救いから洩れるような気になる。愚かしいことだ。

口伝鈔に曰く、「然るにわが心凡夫げもなくば、さてはわれ凡夫にあらねばこの願に漏れやせん、と思ふべきによりてなり。然るに吾等が心すでに貪、瞋、痴の三毒、皆同じく具足す。これが為とて起さるゝ願なれば、往生その機として必定なるべしとなり」

何回となく読み返し／＼すればするほど、いよ／＼味わいの深くなるのを覚え、且つ我が身の幸を喜ばずにはいられない。私はおろかであつたことが、またとなく有難い。私は悪人であつたことがまたとなく有難い。

(昭和十三、二月)

春めき渡つた今日、この頃、舗装道路に凍りついた雪を

町内総出で取り除いた。見るからにすが／＼しい春の町になつたと思つたら、今度は少しの風に塵が飛び廻る。

町内の若い人々が一晩がかりで路上に水を撒いた。豈はからんや、翌朝になつたらしつかり凍りついてしまつた。町行く人々は歩きにくいことおびただしい。自転車なんかは横すべりして見るも気の毒な様子だつた。よかれと思つてしたことが意外の方面に飛んで渦をまいて多くの御迷惑をかけることが数々ある。私はただ、法を仰ぎつつまっしぐらに進むだけだ。

よきに謝し、あしきに詫びつゝ進むより外ないのだ。それ一つが、私に与えられた心の落付き場所だ。

(昭和十四、四月)

信仰書簡

本日は突然S子様から貴女様のことを聞かされ、何か貴女様のお手紙についての所感をと云われましたので、私の感じさせられたまゝを卒直に申し上げます。

先ずお手紙の中に、貴女様はやゝもすればみ仏様が私から離れていくような気持がすると書いておられましたね。

それは端的に申しますと、自己反省の足りぬところと思います。何となれば自分の現在の二つの苦しみ——それからこの苦しみを生むもの自分の愚かしい行い——この苦しみは好まぬくせに、苦しみを受けるにはおられないよう

な行いしか出来ない自分——このように何とも手のつけられない自分と、み教の光りのもとに、はつきりと自分の姿を知らせて頂くならば、この自分の力では全くどうにもならない愚劣な私の上にこそ、どこ／＼までも附添つて救はずにはおかぬと流して下さる仏様の御涙をどうしてそのまゝお受けせずにおられましようか。苦しい時こそ却つて、み仏様は私の上に強く働いておいでになることをはつきりと味わせて頂くことであります。

それから次に、幸福な日暮しを迎えたいとの御希望でございましたね。ところで先ず幸福とは一体どんなものでしょうか。世間的には、財産、健康、地位、美貌に恵まれることを幸福と申しますが、それも幸福であるには違いありませんが、然しそれらは総て時と共に移り変わる相対的な幸福であります。決して絶対的なものではありません。それらのものがあれば尚更よいと云うだけの幸福でしかありません。従つてそれは倒産をし病弱になり、失敗をし、醜く生れると忽ち消えてしまふ幸福であります。

もつと／＼力強い真の幸福とは決してそんな相対的なものではありません。自分がこの世に生を享けて来た真の喜び——何時どんなに苦しく悲しい境遇に出遇つても、常に味わい得る喜び——このような絶対的な喜びを恵まれた人こそはほんとうに幸福な人と申せるのではないでしうか。

それには、普段よく申上げているように、また前にも書きましたように、苦しみ悩む私の上にたえず附添うて涙をそそいで下さる絶対の同情者——み仏様の御心をいただくことより外に道はないことを私は日増しに強く／＼味わさせて頂いております。

世間の多くの人は先ず何よりも相対的なこの世の幸福を第一にした生活をして居りますが、私は最も肝腎なのは絶対的な喜びであると思います。また或る人は先ず相対的なこの世の幸福を得てから、その後絶対的な喜びを求めようなどと考えておりますが、然しそれは本末顛倒した考え方で、先ず何をさしおいても絶対的な幸福を獲得するのが本当ではないかと思ひます。この真の喜びを得てこそ、始めてその上において相対的なこの世の幸福も心の奥底から有難く、私の生活に生きてくると思ひます。

それから、私共が何かの折に触れて気の利いた明るいころやかな心が起きた時にばかり、み仏様に救われたような気がするの、その明るくなったことを救いのための何らかの足しえにする考え方で、それは何等の機会に崩れて暗い心が起るとすぐ破れてしまうことは請ひ合ひです。金剛堅固の御信心とは、たゞ私という至らぬ者の上に可愛相な者よと流して下さるみ仏の永遠に変わらぬ御涙をそのままに受けることにつきますと思ひます。その結果、私がどのような

に変わったとしても——例えば、喜べたとか、怒らなくなつたとか——そんなことは決して御信心を頂いた証拠ではありません。それを御信心とつかめば崩れるものです。それは非常に危いことです。

また子供を持ち得ぬというお歎きもあられますが、それはよく／＼私の妻も味っていることで、おぼろげながら私にもその御氣持はうかがわれます。實際御氣の毒なことです。全く総てが業因の現われと現在の事実をそのまゝに受けてゆくだけであります。けれども世間には、よく前世の業とか云いかぶせて問題をうやむやのうちに片附けている人がありますが、そんなあいまいな態度では、ある程度は苦しみにも耐えていけますが、いよいよ／＼たまらなくなると、前世の業もそつちのけにして逃げ出してしまひます。

だがそれは当然の事と思ひます。何しろ前世と云うものは現在の私の意識内容にはない世界ですから、それに対する私の責任を感じる程度はまことに薄いわけです。それよりも先ず、現在最も確実なこの世に生を享けてからの私の行動を深く内省してみることです。よく／＼深く反省すれば、私の現在の苦しみの大部分は、この私の過去の行動の総決算で苦しんでいるのではないでしょうか。そして私が何故にこうした苦しみを造るような行動しかとらずにはおられなかつたらうかと、そこを突込んで考えて行つた時に、

香月院語録

四海のうちみな兄弟なり

二四六

「蓮如上人仰せられ候。信を得れば、先きに生るる者は兄、後に生るる者は弟よ。法敬坊とは兄弟よと仰せられ候」

仏恩を一同にうれば信心一致の上は、四海皆兄弟と云えり。このおこころは、信心を得たれば、先きに浄土に往生する者は兄、命長らえて後に往生する者は弟、同一味の信心を得た者は兄弟ゆえに、法敬坊と我とは兄弟よと蓮師仰せられたり。仏恩を一同にうれば等、これ正しく其の四海兄弟の訳を仰せられるなり。しかれば阿弥陀仏の御慈悲のことなり。仏恩というがすぐに御慈悲のことなり。

『行巻』の御言葉に、弥陀の御慈悲をば、徳号の慈父と光明の慈母とおわけなされて、名号は父の如く、光明は母の如く、その父母を慈悲の父母と二つにお分けなされてある。

しかれば、他力信心の行者はみな其の光明名号の慈悲の父母より生れた信心なり。それで一致に思つて居る故に、一天四海の一味安心の同行は、名号の慈父、光明の慈母の両親が同じこと故に、皆兄弟と云うことで、信心一致の上は、四海皆兄弟といえり、と仰せられたものなり。

そこで始めて前世の宿業と云つたものの存在がはつきりとして私の心の底に根ざしていることが知れてまいります。

その目前に明らかに認識出来る現実の自己反省を全然抜きにしてしまつて、うやむやのうちに、前世の宿業とのみ片附けてしまふことは、実に愚かなことと思ひます。この世に生を享けて後の私の行動を徹底的に反省して現在の苦しみはすべてそこから生れて来ていることがはつきりすれば、この世のどんな苦しみでも引受けていく力が必然的に生れてくることは疑いを容れません。それは自然法爾の世界の然らしむるところ、お念仏のお働きの然らしむるところと信じます。

一寸ばかりと思ひながら、つい長たらしい駄文を書きました。失礼いたしました。

昭和九年十月二十日 凡衆

藤沢様

念仏の一本道や雪の原

年忘れ 何忘れても御念仏

歎異抄に導かれて (第七章)

花田正夫

念仏者は無碍の一道なり。
そのいはれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し魔界外道も障碍することなし、罪惡も業報も、感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆえに無碍の一道なりと、云々。



尊号真像銘文に「無碍といふはさることなしとなり。衆生の煩惱惡業に碍へられざるなり」とある。省みると我は、煩惱具足、罪業深重の身で何時でも何処でも碍りばかりである。それをかねてしめす弥陀仏は、大悲大願をおこされて、それに碍えられぬ慈光をそそいで下さるのである。白杵祖山老師は、直腸癌の最後の病床にあつて、碍りなくすべてを照らすみひかりはさはりある身のうえにこそ照れ

と讃仰せられた。碍りの中でも、死病の苦に直面するにまさるものはない。又先年亡くなられた癌病の信友の歌は

山口康の方

「そのいはれいかんとならば信心の行者には云々」と続くが、本願を信じ念仏申す者の上に、仏力自然として建現す

「不請之法 施諸魔衆 如純孝之子 夢寐父母」

る有様を具体的に述べられたのである。それは「不請の法」で、我々が請いて与えられるものでなく、むしろ請める心もない身に、仏から恵まれるところで、これなくしてははてしない苦海に沈む外はないのである。

「魔界外道も障碍することなし」とある。

魔に種々あるが「幽霊の正体見たり枯尾花」で煩惱の幻影である。仏教では聞法を妨げるものを魔と呼び、その根本は煩惱である。

マシイ付4章

「天神地祇も敬伏し」とあるが、我々が人間に生れたことを素裸のなりに喜べるのは、おへだてのない本願の大悲に浴する御蔭による。源信僧都は、横川の法語に「まず三惡道を離れて人間に生るること大きなよろこびなり」と渴仰せられ、また越後の良寛和尚は、

不可思議の弥陀の誓のなかりせば何をこの世の思ひ出とせん

と、人間に生れた甲斐を喜ばれている。

さてこのよろこびに恵まれて、十方を合掌し、天の神、地の祇に御礼申さずには居られぬのである。これに応え給うて天地の神祇も念仏の信者を敬いたたえて下さるのである。古歌にも、

こころのみまことの道にかないなば 祈らずとても 神やまもらん

とあるが、凡夫にまことはない、そこに我が身の虚仮不実を慚愧しつつ、何処までもお見捨てのない仏のおまことを頂いて迎える時、諸天善神は祈らずともよろこびまもつて

病める身も弥陀の誓に生かされて生死の海に夕陽かがやく

と遺詠を送つて下さった。

池山榮吉先生が還曆を迎えられた時、

たのまるるただ念仏のわれにありさるべき業はさもあらばあれ

と歳旦に詠じられて「よかれと願つて六十の春秋を重ねたが、苦が軽くなるところじゃない。年と共に苦は増すばかりであるが、年頭若水をつかい、仏前に坐して念仏申した心を歌にしてみた」と無碍光のたのもしさを讃えられた。我々は生命のある限り、臨終の一念にいたるまで煩惱は熾盛で碍りばかりであるが、それにさえられぬ仏の大悲の光！ 謝すべき言葉もない。

他山の石であるがキリストの荒野の試みでは、食欲、名利、疑信等がサタンとなつて試みるが、すべてを退けるのであるが、仏陀の降魔成道は、最初は煩惱を避けて山に入り、次に煩惱と対決しようとして六年の苦行のはてにその不可能を悟り、最後に菩提樹下に正座して煩惱を静観されるに及び、煩惱魔はその正体をあらわして、仏陀に喜び帰順して仏陀の円光下におさまるのである。

我々は仏の行履を辿ることが出来ないが、その者を残らず成仏せしめようとの御誓いから与えられた念仏成仏の一道をいただくばかりである。

次に「外道」とは、無常、無我、涅槃寂靜の道以外にある道で、或は有の見、無の見、唯心論、唯物論等々と九十五種あつて、それを固執するのである。龍樹菩薩がこれらの邪執邪見を破つて中道を高く掲げられたことは誰も知ることである。

よしあしの中を流るる阿弥陀川 よしあし絶えてか

かる瀬もなし

と、その中道、無我の道を讀んでいる。
歎異抄第十二章に「……たとひ諸門こそりて、念仏はかひなきひとのためなり、その宗あさしいやしといふとも、さらにあらそはずして、われらがごとく下根の凡夫、一文不通のものの信すればたすかるよしうけたまはりて信じ候へば、さらに上根のひとのためにはいやくともわれらがためには最上の法にてまします。たとひ自余の教法はすぐれたりともみづからがためには器量およばざればつとめ難し云々とにくひ氣せずばたれのひとかありて仇をすべき」等は、無我な信者の進む道で、外道の人も妨げることは出来ないのである。

「罪惡も業報も感ずることあたはず」とは、本抄第一章に「惡をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆえに云々」とあるところである。

因縁果はすべてのものに通じる道であるが、罪惡を犯すものは惡果をうけねばならぬが、和讃に

無碍光の利益より威徳広大の信をえて

かならず煩惱のこほりとけすなはち菩薩の水となる

罪障功德の体となるこほりと水のごとくにて

こほりおほきにみつおほしさはり多きに徳おほし

と、転惡成善の恵みをいただくのである。

徳富氏の瀬戸内海の歌に

人の子が貝堀りあらず砂濱を平になして潮の寄せ来ふ
とあるが、池山先生の還暦に

慘怛たる悔ひののこせし――のあとかたもなき

無碍の一道

とこの仏徳を謝していられる。

清沢満之師の言葉に「それは私の責任であると自殺すれば、生命はいくらあっても足らないし、それによって何一つ解決されない。如来にその責任を負うていただくより道はない」とあるのも思い併せられる。

「諸善もおよぶことなし」とは、本抄第一章に「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆえに」とある。

二元対立の相對差別の境界では、智者は愚者を見下げ、愚者は愚痴を流して人から捨てられ、善人は独善になつて他を裁き悪人は卑屈となる。こうしてはてしのない流転が続くが絶対の世界は心も言葉も及びもつかない。この身に今一人の私となつて手を執つて下さる方さえあれば満足であるが、仏の無碍光こそなくてはならぬ唯一の光明である。

あ と が き

花見堂に甘茶のかおる四月になり、仏陀の誕生日もまいりました。若い人達には入学、卒業と新しい出発となりました。皆様方に御心配をおかけ致しました私の病氣も未だに恢復とまで申せませぬが平穩にすごさせていただいて居ります。

「宿業で病めるこの身に、諸仏如来は、同行知識と現われ
てお護り頂く」と臼杵老師はおよろこびになりましたが、
病中そのことを、拙い身にもおへだてなく蒙る恵みと念仏
裏に御礼申させていただきます。

○
法然上人の御母君への御手紙はかつて拝読し身にしてみ
て私への教としてただかすにはいられません。南無阿弥陀
仏、〃〃〃〃〃〃〃〃。

近角先生の御教は信仰余瀝から頂きました。とかく信仰
が概念化して実生活をはなれ易い私共に、信仰を味うには
現実生活が大切で、恰も字を書くには紙が要るに等しいこ
とを知らされました。又他力の信は仏語を聞いて、疑えな
くなることで、仏力ひとつの御働きによることを教えられ、
我れ信ず、ということの間違いを知らされます。

釈尊の本生譚は、仏の誕生の月によりました。

西元宗助先生には何時も私の身を御心配下さることを謝
して居ります。今年にて龍大の御講議をおやめになります
由で学生諸君にとつては残念な事でありましょう。

岩崎成章先生の一文は「極重悪人唯称仏」の御心を無相
師の法語から御述べ下さいました、親の眞実心を知らされ
て自分の不孝者も知らされます。

凡禿居士は仙台で妙人であると、白井成充先生も称え
られた人であります。其時々々に自分の生活の上に教えら
れた信味を有縁の方々にも頒たれたものから頂きました。

本月も例会を休ませていただきます。大病すると老軀に
は体力の恢復がおそく、我ながらあきれております。又皆
様に申しわけのない失礼しておりますことをおわび申しあ
げます。皆様方の御力に支えられて本月号を御送りさせて
頂き、御礼の言葉もありません、ありがとうございました。

定 価 半 年 八〇〇円（送 共）
一 年 一六〇〇円（送 共）

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
天 野 昭 夫
印刷人

名古屋南区駈上一丁目五番五号

発行所

慈 光 社

編 集・発行人 花 田 正 夫

電 話 八二一七〇三七番

振替口座 名古屋 六二四二番
郵便番号 四 五 七